

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	ビザンツ文学余滴 第2回（通算第3回）：テオドロス・メトヒテス『格言的所見』から
Author(s)	戸田, 聡
Citation	プロピレア , 24 : 84 - 92
Issue Date	2018-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046849
Right	Copyright (c) 2018 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ビザンツ文学余滴 第2回（通算第3回）

—テオドロス・メトヒテス『格言的所見』から—

戸田 聡

北海道大学大学院文学研究科准教授

翻訳序

まず、表題の書き方が「第2回（通算第3回）」と、やや、ややこしいことになっているのは、ビザンツ文学に属さない作品を扱った前回は「番外編」と称したことによっており、他意はない、ということをお断わりしておく。

ところで、テオドロス・メトヒテス（1270-1332）である¹。繰り返すまでもないかもしれないが、そもそも筆者のビザンツ文学とのかかわりは故H=G・ベックの著作、正確に言えば、故渡邊金一先生の編纂に成るベックの著書『ビザンツ世界の思考構造——文学創造の根底にあるもの——』（岩波書店、1978年）との出会いに由来しており、そして最初に衝撃を受けたのは、ベックが引用するテオドロス・メトヒテスの次の言葉を目にした時だった²。

すでに言われたすべては他人によって言われており、声を出して言うべき何ものも、もはや今日のわれわれにはのこされていない。正確を期するなら、この言葉自体は註の中で提示されており、その註が付された本文は次のようになっている³。

疑いなくビザンツ文人は、ギリシア古典を、唯一回限り到達された文学一般の手本と考え、その圧倒的な重圧をひしひしと身に感じていた。テオドロス・メトヒテスのような洞察の持ち主はこれを、まさに衝撃的な仕方で定句化した（ここに当該註——戸田）。

¹ 生没年については A.M. TALBOT, art. “Metochites, Theodore”, in: A.P. KAZHDAN et al. (eds.), *The Oxford Dictionary of Byzantium*, vol. 2, New York/ Oxford: Oxford University Press, 1991, pp. 1357-1358（頁数は通しページ）による。

² 『ビザンツ世界の思考構造』、88頁。

³ 同、39頁。

だが、ここでベックが言いたかったのはむしろ直後の、次の部分だった⁴。

それにもかかわらず、そのかれ [メトヒテス] 自身も、だから自分たちの文学活動一般が無意味だとまではいわず、反対に自身の文学作品を、感動的な、往々痛々しいまでの配慮でくるみ、それを後代に勧めた。そしてそれを、古代と張り合おうとしないまでも、なお自身の独自の妥当性を主張するまでの水準に高めたのである。

つまり、今から思えば明らかに、ベックの主張の力点は後半——すなわちビザンツ文学は、仮に「中古品文学」などと揶揄されることがあるとしても（そしてその揶揄に大いに根拠があるとしても）⁵、同時代人たるビザンツ人たちに対してなお有意義なものだったのであり、さらにその中には文学として鑑賞に値する作品も見られたのだ、という点——にこそあったのである。

しかし、最初にベックの上掲書に出くわした当時の（思えばまだ若かった）筆者にとって最も印象ぶかかったのは、最初の言葉だった。その理由、つまり筆者の個人的感懐などといったことをくどくどと記すべきではなからうが、少しでもご容赦願うと、幼稚なキリスト教徒として聖書だけは一応読みつけていた当時の筆者の頭には、くだんの言葉の中に旧約聖書の「伝道の書」（当時は口語訳で読んでいたので、同訳から引用しておく）の中の、例えば 1:9-10「日の下には新しいものはない。『見よ、これは新しいものだ』と言われるものがあるが、それはわれわれの前にあった世々に、すでにあったものである」と、共鳴するものが感じられたのだろう。また当時、ろくに知識を持ち合わせていないくせに、I コリント 8:2 のパウロの警句「もし人が、自分は何か知っていると思うなら、その人は、知らなければならないほどの事すら、まだ知らない」を筆者はありがたがっており（そしてこれを、いわゆる「無知の知」を一步前に進めた言葉だと当時理解していた——この理解自体は今でも変えていない）、そのこともまた、メトヒテスのくだんの言葉を（どういう次第でかは自分でも必ずしも判然としないが）印象ぶかいものにした気がしている。さらに、一般にいわれるオリジナリティーなるものに対する根源的な懐疑心も、少なくとも筆者の場合にはメトヒテスのこの言葉と結びついて在る。

ということで、今回はメトヒテスのこの言葉を、それが語られた文脈が多少

⁴ 同、39-40 頁。

⁵ 「中古品文学」としてのビザンツ文学については、戸田 聡「『ビザンツ世界論』に見る H・G・ベックのビザンツ理解をめぐって」、『エイコーン——東方キリスト教研究』46 (2015 [2016])、17 頁註 26 及び当該註の本文を参照。

ともわかるような仕方で日本語にしてみたい、と考えた次第である。

但し、先回りして言うと、メトヒテスに関することは今回で終わりそうには到底ない。というのは、今回メトヒテスを取りあげるに当たって多少関連文献を見ておこうと、ビザンツ学関係文献に関して日本有数の蔵書を有する一橋大学図書館などで調べたところ、1987年刊行の或る論著（オランダのライデン大学で学位論文として提出されたものらしい——ライデン大学と言え、筆者自身の学位も同大学で得たものだったりする）が、テオドロス・メトヒテスと、彼に関する現代の学者の諸研究（何人か挙がっているが、特にH=G・ベックの著書⁶）とを、メッタ斬りにしているのを発見したからである⁷。ベックは、当時既に引退していたとはいえ、ビザンツ学の代表的な学術雑誌 *Byzantinische Zeitschrift* の主編集者を務めたことのある学者であり、そのベックをこき下ろすとは大した女傑だと言わざるをえない。のみならず、オーストリア・ビザンツ学の総帥H・フンガー（1914-2000）も槍玉に上がっていた。ただ、これだけの学者たちを敵に回しての議論なので、当然ながら当の論著に対する書評は総じて芳しくない⁸。さらに、この著者は時をおかずに2冊目のビザンツ学的著作を発表したが（筆者未見）、これも批判的な書評によって抜

⁶ Hans-Georg BECK, *Theodoros Metochites. Die Krise des byzantinischen Weltbildes im 14. Jahrhundert*, München: C.H. Beck, 1952.

⁷ Eva DE VRIES-VAN DER VELDEN, *Théodore Métochite. Une réévaluation*, Amsterdam: J.C. Gieben, 1987.

⁸ 瞥見しえた書評は以下のとおり。H. HUNGER, *Byzantinische Zeitschrift* 80 (1987), pp. 374-377; M.-H. CONGOURDEAU, *Revue des études byzantines* 46 (1988), pp. 251-253; W.K. HANAK, *American Historical Review* 94 (1989), pp. 429-430; A. LEROY-MOLINGHEN, *L'Antiquité classique* 58 (1989), p. 506; F. KIANKA, *Speculum* 65 (1990), pp. 394-396. これら書評の中では Hanak によるものだけが全体として比較的好意的に書評対象を扱っていると言える。

なお、ベック自身がどう反応したかについては、くだんの著作に直接に反応した文章は無論ないので、わかりようがないが、一般的な意味でベック自身の著作履歴を追うと、彼は1990年に *Abschied von Byzanz*（訳せば「ビザンツからの離別」）と題した私的な文章を発表し、ごく近い人々に配ったようである——題からして、どう見てもこれは、ベックによる、ビザンツ学からの完全引退宣言と受け止められて当然だろう（女傑からケチョンケチョンに批判されて嫌気が差したか？）。しかしそのベックは1993年に *Umgang mit Kettern*（訳せば「異端者たちとのつき合い」——よりによってテーマは「異端」である——。論説と翻訳の両方を含む）を刊行し、さらに翌1994年、彼の主著の中で最も問題的な著作であっただろう *Das byzantinische Jahrtausend* の第2版（その邦訳が拙訳『ビザンツ世界論』、知泉書館、2014年、である）を出している。つくづく、このベックという御仁は人を食った人士、言い換えれば皮肉屋（もちろんその最良の意味で、だが）、であるように思えてくる。

かりなく応接されている⁹。管見の限りでは、その後この著者はビザンツ学的な業績を挙げていないようであり、これだけ叩かれれば致し方なかったように思える。

ということで、ベックらを批判した上掲書に対する評価はビザンツ学的には既に定まっているのかもしれないが、とはいえ筆者としては、一応その批判（正確に言えば、現代の学者たちへのというよりもむしろ、テオドロス・メトヒテス自身への、くだんの女傑アマゾンの批判）を咀嚼した上で自分なりの判断をまとめてみたいという気が湧いてきた。本誌を編纂する日本ギリシア語ギリシア文学会は来年 2019 年 2 月に研究集会を催すそうなので、（無論、間に合えば、だが）その折りに何かしら発表できればと思っている。そして実を言えば、発表内容に当たる、批判への応答は、既に頭の中になくもないのだが、まだ批判の根拠をきちんと調べていないので（よって、その応答は現時点では「作業仮説」とでも言うておくべきだろう）、ここでは記さない。さらに言うと、本来なら本稿でテオドロス・メトヒテスという人物について多少は記しておくべきかもしれないのだが、問題の書はまさにメトヒテスの人物像をどう理解するかにかかわるものなので、これまた現時点では記さないこととする。

* * *

ベックが引用した例の文章を含むのは、テオドロス・メトヒテスの著作『格言的所見』*Σημειώσεις γνωμικαί*（或いは *Miscellanea*）である¹⁰。この著作については従来、19 世紀前半にミュラーとキースリングによって刊行された本¹¹のみが存在すると、少なくとも筆者はつい最近まで思っていた。19 世紀前半の刊行物だから無論非常な年代物であり（とはいえビザンツ学関係のギリシア語本文

⁹ L. MAKSIMOVIĆ, Review of Eva de Vries-van der Velden, *L'Elite byzantine devant l'avance turque à l'époque de la guerre civile de 1341 à 1354*, Amsterdam: J.C. Gieben, 1989, *Byzantinische Zeitschrift* 83 (1990), pp. 487-489.

¹⁰ メトヒテスによるこの著作の著作年代について、DE VRIES-VAN DER VELDEN, *op. cit.*, p. 261 は 1326/1327 年としている。

¹¹ Θεοδώρου τοῦ Μετοχίτου Ὑπομνηματισμοὶ καὶ σημειώσεις γνωμικαί. *Theodori Metochitae Miscellanea Philosophica et Historica*. Textum e codice Cizensi descripsit, lectionisque varietatem ex aliquot aliis codicibus enotatam adiecit M. Christianus Godofredus Müller. Editio auctoris morte praeventa, cui praefatus est M. Theophilus Kiessling, Lipsiae: Sumtibus F.C.G. Vogelii, 1821. 表題自体にあるように、ミュラーが基本的に校訂を行なったが、刊行より前の 1819 年 8 月 10 日に死亡したため、残された作業をキースリングが行ない、かつ序文を付して刊行へと至った。今回翻訳する部分は同書の冒頭部分（pp. 13-18）である。因みに、筆者自身は本書の電子ファイルをフランス国立図書館の Web サイト Gallica で入手した。

の場合、もっと古い刊行年代のものもあるが)、その古さゆえにだろうか、御大ベックによれば、この校訂版には種々不備があるらしい¹²。よって、メトヒテスの以下の文章(筆者のギリシア語力にとっては極めて難解だった、と白状しておく)にとんちんかんな部分が散見されれば、少なくとも或る程度は校訂版の校訂の拙劣さのせいだと弁解しよう、などと予め考えてもいた。

ところが、学問の進歩の恵沢はビザンツ学のような分野にすら及んでおり、つい最近、この文章の新校訂版が存在することが判明した(といっても、今から15年以上前に刊行されたものだが)¹³。北欧の西洋古典学関係の叢書の1冊のようで、入手可能か否かが懸念されたが、幸い一応入手できたので、この新校訂版によって以下訳出を行なうこととした。

この新版は、旧版たるミュラー・キースリング版に在った章区分(以下訳出する「序言」は同版では第1章)の下位にさらに2つの区分を設けている。そこで本翻訳では、最上位の区分を(旧版と異なり新版の呼称に従って)「エッセイ」と、そのすぐ下の区分を「章」と、さらにその下の区分を「節」と、各々称し、章区分は太字で、節区分は(基本的に文頭の)字の左肩に付く上付きの数字によって、各々示した。そしてこの区分によると、以下訳出するのは『格言的所見』の冒頭(第1エッセイ)に当たり、そして、筆者に上述の衝撃を与えたメトヒテスの文言は、第1エッセイの中の第2章第1節の冒頭に見いだされる。[]内は筆者(訳者)による補足を意味する。

¹² BECK, *Theodoros Metochites*, p. 24 n. 1 を訳出すると次のとおり。「加えて、[Σημειώσεις γνομικαί]の校訂版はいかなる意味でも現代の要求から見て充分でない、ということがある。稀でない印刷誤植を度外視しても、校訂者たちは、理解不能な箇所や、確実に本文が損なわれている箇所を、改善しないまま放置することをしばしばしている。彼らは、重要な(そしてたぶん唯一正しいであろう)読みを、本文へと受け入れるのではなく、異読一覧の中に放置しており、さらに(メトヒテスの書き方からすればまさに重要であったに違いないだろうに)本文の階層化や句読法に対して、あまりにも僅かな配慮しか払わなかった」。

¹³ Karin HULT (ed.), *Theodore Metochites on Ancient Authors and Philosophy. Semeioseis gnomikai 1-26 & 71. A Critical Edition with Introduction, Translation, Notes, and Indexes* (Studia Graeca et Latina Gothoburgensia, 65), Göteborg: Acta Universitatis Gothoburgensis, 2002. 1993年に始まったキュプロス大学とヨテボリ大学の共同企画「Metochites Project」の一環で刊行された由。同書の pp. 20-26 頁には今回の訳出部分の原文が、見開きの pp. 21-27 には英訳が載っている。なお、本叢書は Göteborg University の Department of Classical Studies が刊行主体だったと思われるが、たぶん改組の結果だろう、同 Department はなくなり、現在同大学には Institute of Classical Studies が存在する由。ここでも西洋古典学部門は改組によって潰されつつあるのかとの感を禁じえない。

格言的所見（抄）

テオドロス・メトヒテス

第1エッセイ：序言——その中で、今や語ることは不可能である、ということ [について]。

1¹ さて、今や時代の後期の者であり、[観照的でなく実践的な(?)] 人生に属する者たらんとしてきた我々にとっては、いかなる仕方においてであれ、言論を用いることは可能でない——もし誰かが、ともあれそして何らか、[言論を] 用いることが可能だったとしても。² 一方で、言論の点でも人生の選択の点でも実証済みの男であってローマの覇権の後期の時代に生と政事とに出くわした人であり、そして比較的 [或いは「極めて」] 正確な仕方で、かつ一度きり彼に最良と思われた仕方で、[ローマの] はや病める国事を取り扱ったローマ人カトーは——³ 或る人が、時機を失してでなくと私には思えるのだが、言ったところによれば——、プラトンの『法律』や『国家』の中で生きたかのように、そして他方、ロムルスとローマ [市] との諸政体の沈殿物の中で生きたのでない者として、当時の合法的な第一の支配的地位、すなわちコンスルの [地位] をしくじったという——もし実際、当時国事の中にあつた人々のうちの誰か別の人が [相応だったとしても]、彼 [すなわちカトー] は [それを] 得るのに特に相応な者だったのに。⁴ 他方で、少なくとも本当に人生全体と人間的諸事との沈殿物の中で今や人生と生とを過ごしてきた我々 [すなわちメトヒテス自身] はと云えば、我々がどのように生きることができるかに関して、他のことどもを詮索するのを、私は他の人々に任せる。そして少なくとも私自身にとっては、ここで [それら諸事は] 考慮されずにあるように。⁵ 但し少なくとも、徳の無力さ・無用さを断罪することは、少なくとも今は可能でなく、一度きりでも可能でなく、あらゆる機会にあらゆる諸事の中で可能でなく、そしてこれ [すなわち徳] をタイミングの悪さゆえに時として人生から放逐すべきでは全くなく、むしろ自然本性は、あらゆる機会及び諸事を通じて、無傷にかつ無害に徳を用いる能力を、人々に与えたのである。⁶ さてそして、少なくともこの言論にとって目的であったことは、今や何かしらを語る力を有する人々にとって、語ることを用いることは今やほぼ不可能だろう、ということ

ある（或いは彼らはまた、何について〔語ることを〕用いるだろうか？）¹⁴。

2¹ というのも、言うなれば、先にあったすべてのことどもは他の人々によって把握されてしまっており、のちに我々のために、声〔或いは言葉〕の使用のために残されているものは今や何もないからである——神的な諸事に関することども（そして特に、人がそれらに対して義務的に注意を払うのが正しいと思う、そういうことども）も、他の諸事に関する外的な知恵に属することどもも。² 実際、あらゆる聖なる書物を、そして、旧い託宣〔＝旧約聖書、だろ〕及び新しい託宣〔＝新約聖書、だろ〕とみなされて与えられている限りのものを、人生の点でも言論の点でも非常に驚くべき実に極めて多くのかの男たちは、非常な労苦を通じて言論において探究したのであり、³ そして彼らは、人々にとっての極めて大きな利益のために、知恵の装備を実に良く用いた——これらのことのために、また、それらの詳細な考察と報告のために、また、善の諸法と徳とのその他あらゆる発見及び素描のために。⁴ しかしまた、存在するものの考察に関して人間の知恵によって理解された限りのことどもも——実に極めて多数であり、かつ、探究のために存在する諸々の相違に関して様々である——、また、言葉の鍛錬に関する限りのことどもも、先にあった〔それら〕すべてのものは、我々より以前の人々によって作り上げられた。⁵ そして、宴会の極めて十全な実現においては、異なる様々なものが異なる様々な人々から〔もたらされる〕、そのごとくに、かくてあらゆるものが各々の人々によって、人生のために用意され整えられている——かの昔の指導的な人々の諸論考について、あまり労苦をいとわない仕方で、かつ自分たちよりのちの人々のために親切心から、語る人々によって、また、昔の人々に加えて自ら若干の持ちこむ人々によって。⁶ そして少なくとも我々には、ほとんど何も残されておらず、また、いかなる有能な人にとってみてもたぶん、共通の利益をもたらし産物〔或いは貢献〕のためにいかなる余地もなく、またしかし、責められる余地のない何らかの証明と今後の進歩の競争とのためにいかなる機会もない——ひたすら、十全な必然として、全く以て舌の無為と封じ込め以外にはないのである。⁷ というのも、理性を働かせる人がいかなる所にいようとも、その人は新たなことを語ることはできず、むしろ、既に誰かによって以前に成し遂げら

¹⁴ 新校訂版はこの（）内の部分（その原文は Ἡ περὶ τίνος ἂν καὶ χρῆσαιτο;）を第2章の冒頭とし、その直前の語（χρησθαι）のあとにピリオドを打っているが、本翻訳ではこの点では旧版の句読法に従い、χρησθαι のあとに打つべきはコンマであって、第2章は上記（）内の部分の直後（その冒頭は原文では Πάντα γὰρ ...）から始まる、と解釈した。

れたこと、そして聞く人々によって予期されたこと [のみを語ることができる] だろうから。そしてそこで [その人にできるのは]、これらのことを不快な仕方でもたらずことか、或いはたぶん名誉心のためにもたらずことか、或いは、少なくともありそうなのは、せめて何らかの利益のためにもたらずことである。⁸ そして既に以前に他の人々が、そしてたぶん少なくとも全くもっとまじな仕方⁸で熱心に取り組んだことどもについて、人が今在って自ら熱心に取り組むことや、一度でも自分が嘲笑を受けてまで [熱心に取り組む] 必要の全くないことどもによって追い立てられることには、いかなる益もないのである。⁹ そして、疑いなくこのことは特に、上述された仕方⁸で、より神的なことがら自体について [言えるのであり]、また少なくとも、人間的な知恵の他の配慮・考察に関する限りのことども [について言える] ——たぶん人が自分自身のものや自分の財産を見せびらかすことができるであろうのと同様に。

3¹ 今や我々すなわち文学にかかわる者たちは、言葉なしの状態に関して、時機 [= 哲学などが盛んに論じられた時代、ということか?] から非常に遠く離れてかくも不幸な状況にあるので、その結果我々は、——諺によれば——自分のものとなったスパルタを治めるのでなく、むしろ特に運命に耐えるというこの必然を有するのであり、そしてこのことを——言葉によれば——少なくとも我々は今や、[それが] 我々のものにもなったその仕方 [に依じて?]、たぶん全く痛々しい仕儀で、しかしそれでも耐えるという [必然を有するのである]。² 特に、少なくとも私はこれらについて絶えず思いめぐらして、とはいえ一方で悲しみつつ (というのも、さもなければいかにして私は悲しむことにならなかつたらうか)、他方で悲しみと共にすべてのものから身を避けて、そして速やかに直ちに、何らかの思念が何らかの欲求——軽蔑されるべきものではたぶんなく、また全く理性の外にあるのでもない、そういう欲求——に従って私をそれへと突き動かす、そういうものへと向かう。³ というのも、さもなければ私は何をしようか。つまり、多くのものがありかつ多種多様で、そして特にすべてのものが即座の使用のために用意万端である、といった状況では、食事を必要とする者などいないのである。⁴ そして我々に関してはたぶん、一体そこで、あらゆる秀逸さとすべての良きものとで満ちあふれた食卓で [言わば、末人として?] 柔弱に暮らすことは¹⁵、——再び諺によれば——アビュドスのデザートであり、かつ船酔いの エビフォレーマ元 アフオルメーであるだろう。⁵ しかしながら

¹⁵ 校訂版では ὄτι とあるが、本訳では ὄτι と読み、ここでは “ὄτι is also used pleonastically with the inf. and acc.” (LSJ, s.v. ὄτι, II. 2.) の例だと解釈した。

今や、若干の覚書や個別的な所見を、切り詰められた形で公けにしようというこの思念が——ひよっとするといかなる理性からも外れて、ひよっとするともうでもなく——私のもとに来た。それは、今を生きて折々に私が思いめぐらしかつ独力で推論した若干のことについて、[公けにしようというそのような思念が] 後に続くためである——⁶またたぶん、思うに少なからぬ人々が、聞くや否やそれら弁別物に同意して賛同の声を上げて私に有利な証言をするであろう、そういう事柄について（彼ら自身のためにも、[人の考えを] 変えさせるそれら思念がこれらのことを自らの中に蔵していた、そのごとくに）。⁷そしてたぶん、必然的な言葉なし状態について、また、そこで一体語られる中での「無為」や「不愉快さ」或いは「不幸」について、少なくとも今に生きる我々によって[如上で] 述べられたことは、[本論考の] 目標に即するなら一如であるだろう——すなわち同時に、最初の目標であり、同時に、以下の諸々の事柄の序言である。（訳出終わり）

* * *

一言蛇足を記すことを寛恕されたい。すなわち、この「序言」を記したあとメトヒテスは延々百数十にも及ぶ「エッセイ」を書き連ねている（そしてそれが『格言的所見』の総体である）わけだが、少なくともこの分量からする限り、メトヒテスが事実として「我々のために、声[或いは言葉]の使用のために残されているものは今や何もない」などとは実際には微塵も思っていなかったことだけは、明々白々だと言ってよいのだろう。もちろん、だからと言って、ビザンツ人は古典時代の文物から「圧倒的な重圧」を感じてなどいなかったなどと直ちに結論づけるのは早計に過ぎるだろうが、上掲翻訳の第3章第5節以降を見る限り（翻訳の拙劣さゆえ、意味が非常にとりづらいこともまた明白だが）、末人たるビザンツ人にもなお、「覚書」やら「所見」やらを書くというインスピレーションが来うること、そしてそれについて他人の同意を期待できること、という考えが浮かびえたことは、「重圧」の当否如何にかかわらず明々白々だろう。ここでは少なくともこれだけのことは確認しておきたいと思う。（通算第3回終わり）